

同人誌(2014年版)

風 狂

風 狂 の 会

創刊の言葉

編集委員長 北岡 善寿

齋藤 志未刊詩篇

おんな

齋藤 志

詩

風狂の風	高村 昌憲	(2014年8月登録)
息子の転職	堀口 精一郎	(2014年8月登録)
ある佛像展にて	中平 耀	(2014年8月登録)
下北半島恐山へ	なべくらますみ	(2014年8月登録)
戯詩「ようなもの」	北岡 善寿	(2014年8月登録)
サンティアゴの雲	高村 昌憲	(2014年9月登録)
夏の日	北岡 善寿	(2014年9月登録)
咳	長尾 雅樹	(2014年9月登録)
シャーマン	原 詩夏至	(2014年9月登録)
ある女	なべくらますみ	(2014年9月登録)
コナラの大木	高村 昌憲	(2014年10月登録)
動く	北岡 善寿	(2014年10月登録)
風神・雷神圖	中平 耀	(2014年10月登録)
呼鈴	長尾 雅樹	(2014年10月登録)
外来種	なべくらますみ	(2014年10月登録)
横瀬	北岡 善寿	(2014年11月登録)
鳥の聲がしない	中平 耀	(2014年11月登録)
温州ミカン	高村 昌憲	(2014年11月登録)
マンションギャラリー	なべくらますみ	(2014年11月登録)
切断された未来	長尾 雅樹	(2014年11月登録)
酔狂	北岡 善寿	(2014年12月登録)
アベノミクス	高村 昌憲	(2014年12月登録)
夢、眠り	長尾 雅樹	(2014年12月登録)
焼身	原 詩夏至	(2014年12月登録)
お転婆な老嬢たち（Ⅰ）	なべくらますみ	(2014年12月登録)

翻 訳

アラン『わが思索のあと』（五） 高村昌憲訳

五 ロリアン

この度「風狂の会」では文学作品を募集して、それを電子書籍によって発表する試みに取り組むこととしました。電子書籍はご承知の通り、紙上に文字を印刷するものではありません。Ｉ・Ｔ革命によって生れた全く新しい発表形態であります。携帯電話が六億台も世界に普及していて、知の格差が縮小される時代に入っているのです。「風狂の会」というのは確かに存在して、それなりの活動はしているのですが、何せ風狂ですから世間並みのことはせず、十年ばかり前に「風狂の詩人たち」という自己紹介的な冊子を発行しただけです。ものを書く人の集まる会としては不甲斐ない次第です。そこで新しい情報文化の時代に入ったのを機縁に、電子書籍による同人誌『風狂』を創刊して、同人以外からも作品を募集し、優れた作品を発表しようということになったのであります。いろんな意味で多難な時代でもありますので、知的な輪の拡がることを願っています。なお、作品の投稿規定は下記の通りです。

記

☆ジャンル : 詩歌又は評論等の文学作品で未発表のもの（出来るだけ最新のもの）

☆作品の長さ : 詩は400字詰め原稿用紙5枚相当以内、散文は50枚相当以内（長文は翌月以後に分割する場合がある。）

☆締切り日 : 毎月15日（必着）

☆発表方法 : 締切り月の19日までに「ブクログのパプー」の高村昌憲のページに登録

☆掲載費用 : 無料

☆校 正 : 原則として編集担当の責任校正とする。

☆投稿方法 : 郵便番号・住所、電話番号、本名、年齢（以上の「個人情報」は公表しない）、「作品」及び「執筆者のプロフィール」（400字程度以内・『風狂』にて公表する）を次の①又は②（詩の場合は③でも可）のどちらかの方法で投稿して下さい。

①「作品」及び「執筆者のプロフィール」を電子メールの＜本文＞又は＜添付ファイル＞（「ワード」又は「一太郎」）により、高村昌憲のメール・アドレス＜masanot@b01.itscom.net＞へ送信する。次に、「個人情報」を含めて印字した紙媒体の各原稿を下記の編集担当者（高村昌憲）へ締切日までに郵送する。

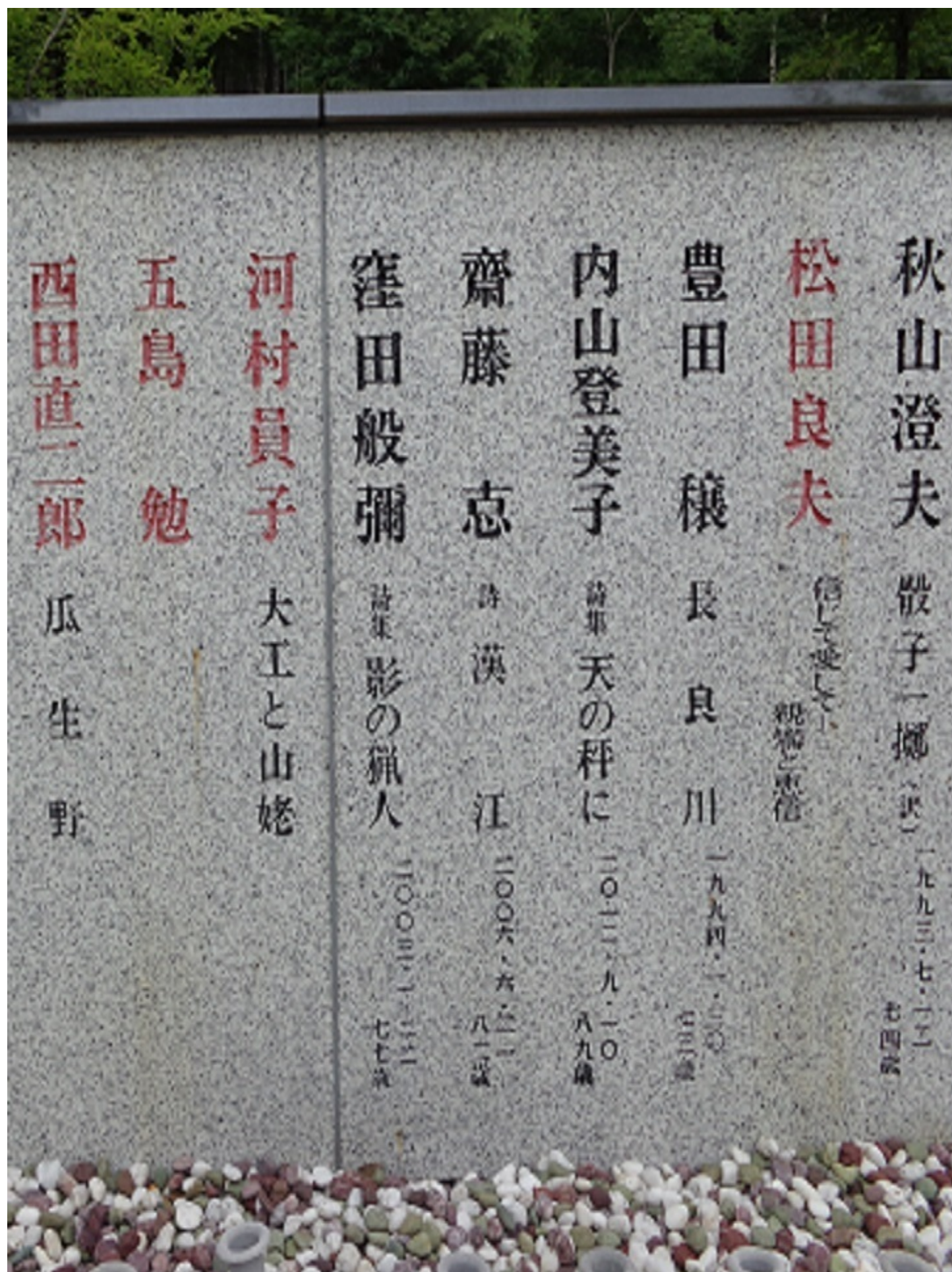
②ＵＳＢフラッシュメモリー又はＣＤ-Ｒの電子媒体へ「個人情報」、「作品」及び「執筆者のプロフィール」を格納して、それらを印字した各原稿と共に下記の編集担当者へ郵送する（電子媒体返却用の返信用封書も切手を貼付して同封すること）。

③作品が詩のみの場合は紙媒体でも受け付けるので、「個人情報」、「作品」及び「執筆者のプロフィール」の各原稿を下記の編集担当者へ郵送する。

〒216-0011 川崎市宮前区犬蔵 2-30-23

「風狂」編集担当 高村昌憲 宛

（以上）



富士霊園の「文學者之墓」に眠る齋藤 忘の墓 (2014年6月撮影)

戦地に向う眠れぬ息子の床に入り
せめてもと女を与えた童貞の母
きりきりと心に雪が降りしきり
竹林も冬の風に鳴っただろう

女はいつも切羽詰った男を抱いた
泉に餓(かっえ) 男は胸に顔を埋めた
涙の谷にうつつは消えてうつつは浮かび
遠くしおさいの音がしていた

海の彼方に大きな月が登っていた
口笛はひょうひょうと波間に消えて
男は今日も孤独な旅をつづけていた
子を抱き 女は空耳の口笛を聞いた

いのちを育む女の胸に菩薩は宿り
子を護る女の心に夜叉は宿った
恥じらいのうなじをおおう髪の乱れ
誕生の秘密を孕む白い腹

潮の満ち引きを羊水にしっかりと捕らえ
この土に新しい今を生み続けて来た女たち
時の筆が今日も永遠の線をたどりつづける
アトリエの窓に今年のわくら葉が舞いおちる

風狂の風

——『風狂』創刊に寄せて——

高村 昌 憲

その桜はなだらかな傾斜地の
中腹に設けられた舞台で踊る
その姿に世俗から離れたヒロインの
華やかでそして悲しい孤高を観る

その桜は樹齢千年と言われながら
葉の花畑の上に若々しい色を広げ
人の心よりも確かなのは四月の青空
亡くなった何人もの恋人たちを映す影

その桜は観る位置によって姿を変え
時間と共に花びらの色を変えて動き回る
絶えず動くのが生きている証しと思え
停止するものには確実に死が訪れる

その桜は日本三大桜の一つと言われ
長閑なさくら湖畔に何台ものバスを呼ぶ
高貴なヒロインを観たくて観客の列は揺れ
丘に建つ大聖堂へ向かう巡礼者たちが並ぶ

その桜の名前は東北の小さな町の「滝桜」
まさしく滝のように枝垂れ桜の花々が咲く
美しいものは正しいと言っている哲学者から
讃美の声を聴きながら何処かで風狂の風が吹く



福島県三春町の「滝桜」 (2014年4月撮影)

男四二歳 リストラの嵐のなかで希望退職
退職金で鎌倉の海のみえるマンションを買った
子供はガラス細工のような目をきよろきよろさせて
パパをアンニャと呼んでいる

学生時代から九十九里浜 バリ島 ハワイと
サーフィンに明け暮れた
会社の頃は朝から夜十一時過ぎまで働く
今は波の荒い朝は真先に海に飛び出す

人生にひとつの崖っぷち さてこれからの丁と半
アンニャはにやり笑って やりたいことをやるだけさ
あれから一〇年 夢のまた夢

鵜沼の彼の新居をたずねると
笑い声を立てて家族みんなで新蕎麦を食べていた
大気は冷え 草木は枯れる夕暮れどき

上野の杜である佛像展を見た。
琵琶湖北岸のお寺やお堂に
昔から祀られてきた佛像たち。

どの像も優雅なたたずまひだが、
千年以上もの長い年月の手が
顔や身体や衣装を粗く削つてゐる。
腕や手指の欹けたもの。
首(こうべ)のないものもある。

中でも二體の像が私の足を止めた。
二體とも首はあるが、
手も指も衣装も満足ではない。
信長の軍勢が攻めてきたとき、
村人が川に沈めて戦火から守つたのだと云ふ。
當時の村人たちの一途な熱い思ひ。
胸に込み上げてくるものがあつた。

會場をまはりながら思つた、
國ぢゆうのお寺やお堂に祀られてゐる
數知れない無名の佛像のこと、
田舎の道端に立つてゐる
お地蔵さまや道祖神のこと。

それらの像の向う側に廣がる
目に見えない奥深い暗がりから
往時の村人たちのつましい暮らしの聲が
低く聞こえてくるやうな氣がした。

◎硫黄の原

車を降りるなり襲ってきたのは硫黄の匂い
咽から胸へと襲ってくる
息苦しさ
死者の怨念ではなかろうに
大祭前の霊場

歩くところどこも
瓦礫のような岩と立ち昇る
瘴気
風もないのに音をたて 廻り続ける風車
赤 紺 桜色

行く先々に立ちつくす石仏たち
野仏のように笑ってはいない
険しい顔 どれもしっかりと頬被りをして
寒気と吹き荒ぶ風から守ろうと
信者たちの想い

この季節にはない筈の暑さ
立ち上る熱気があおる
花の白さ その名を知りたい

熱風が
地蔵の衣を揺らして過ぎる

◎巡るところ

足元の焦げた石 あっちにも こっちにも
一人座った大きさに染みついた硫黄の色

納骨塔を守るみたまいし 転がされたように

惑わされた参拝順路

いつの間に表示から外れて

無間地獄

崩れそうな灰色の石に挟まれた風車が

いっそう乾いた音を立てる

無縁塔

延命地獄

息苦しく歩くわたしは延命を望まない

無縁の人と歩くことも

その人と共にいることに

どれほどの意味があるのか

迷った道を戻り　また同じ道を歩く

胎内くぐりを通った人は

満ちたりた笑みを浮かべ腹に手をやる

地獄の原で

千本の手を持つ観音は

どれほど多くの水子を抱きしめた

雨　風に染められた頬がうっすらと汚れて

生真面目な父親を泣かした

あるいは父親自身が溺れた

賭博地獄　修羅地獄

見てしまったのか

溺れこんだか　血の池地獄

歩き疲れたわたしは

賽の河原に向けて

石を投げる

ひとつ　ふたつ

と自分の声を気にしながら

女の尻ばかり追いかけているとか
力もないのに威張りくさっているとか
そんな腹の足しにもならぬ悪口は止めて
もっと根源的な問いかけを
己自身にぶつけてみるがいい
先ずはあの神様のことだ

—いったい神様はいるのかね
—いたにはいたが死んだのだ
—誰か亡骸をみたかね
—見た者はないけど西洋の哲学者
とかいう者に引導を渡されたのだよ

人間に死んだと見くびられる
ような神様は本当の神様ではない
いいかね
神様は元もところなところにはいなくて
神様のような者が居ただけなんだ
今でもそれは薄っすらと動いているよ

いいかね
神様のようなものの下に
人間のようなものが居て
外でも家の中でも酒ではなく
酒のようなものを飲んで酔っ払い
病気になると薬のようなもの
を飲んで苦しんでいるのだよ
この世の間違いの本は神様ではなく
神様のようなものから始まったのさ
だから世間では政治家ではなく
嘘をつくことが商売の政治屋
のようなものが偉そうな顔
というよりも狸面して横行し
金持ではなく金持のようなものが

数字を刷った紙片を黴菌のように
ばらまいてほくそえんでいるのだよ
繁華な街の地下道では
乞食でなく乞食のようなものが
ダンボール被って寝ているし
鉄筋コンクリートの学校では
先生のようなものがいて子供に
学問のようなものを教えているよ
だから成長しても人間ではなく
人間のようなものにしかねれないんだ
虫けらにだって五分の魂があるというが
それは何故だか外からは見えない
人間のようなものはそこが違って
背広の襟や生白い首の回りに
魂のようなものをちらつかせているよ
「ようなもの」ばかりで成り立っている
有象無象の世の中なのさ
そう思えば何が起ころうと腹も立つまい
俺もお前も人間ではなく骨のない
海月に近い人間のようなものだから
気を楽にして
気紛れに気違いじみたことを書く
詩人のようなものの大法螺や
女子大生が売春しているのではなく
淫売が女子大に通っているのだ
との給う批評家先生の漫談にでも
耳傾けて楽しもうではないか

いいかね
黴菌や蝮は「ようなもの」ではなく
文字通り棲息しているが
これは人間のようなものが創ったものではない
もちろん神様のようなものの設計から
生れ出たものでもない
ところでここに理屈の隙間があるのだよ
大砲も爆弾も毒薬も

「ようなもの」とは言えまい
作り出したのは人間のようなもの達なんだ
「ようなもの」でないものを作らねばならん
という法があるわけでもない
心底人間ならば作らないだろうよ
何と言ったって
人間のようなもの達には血腥い戦争が
身体に痺れが来る程こたえられないのだよ
そんな頭と身体の仕事が運の尽きなのだ
これは他愛もない世迷言かね
何せ神様ではなく神様のようなもの
が高い所にでんと坐っておって
人間のようなもの達を繰り信心させて
賽銭巻き上げるから適わんのだよ
人間のようなもの達は哀れにも
信心すればご利益があると
簡単に思い込むほどくそ真面目だが
どうしてどうして
神様のようなもの以前にいた神様なんて
至って不真面目で
気紛れでやきもち焼きで
その上癩癪持ときているのだよ
海の向うの遠い国では皆

＊腕白小僧が虫けらを扱うように

神様は気晴らしに我々をお殺しになる
と神様の正体を嘆いたものがいるが
こちらでは戦争で神風が吹くと信じていた頃
とうとう風はそよとも吹かずに国は破れた
神様ではなく神様のようなものに
大風を作る力のあるわけではないのだ
やっぱり人間のようなものは
何処まで行ってもお目出度いのだよ
幻想に酔っては後で臍を噛むだけだ
抜穴だらけの法律のようなものは作れても
真の法は何時までたっても作れはしない
土俵の上ならもう死体で

こんな時代に生きている俺たちは
死んだ方が増しなド阿呆だよ
だからと言って
「ようなもの」から逃れて人間に成ることは
空気のない地球の外へ
裸で飛び出すようなものだ

＊沙翁「リヤ王」より

成田からパリ経由でサンティアゴへ
七十八歳の老先生との二人旅は遠い
猛暑の日本からジャンバー姿のチリへ
それでも三十時間をかけた魔法は長い

地球の裏側の町はアンデスの山々が近い
着陸一時間前はトイレが使用禁止だと言う
気流の乱れが機体を揺らすためであるらしい
スペイン語の機内放送を聞いた老先生が言う

サンタ・ルシアの丘に面したホテルからも
アンデスの白い雪が見えるが緑の多い公園
亡くなったアジェンデを偲ぶモネダ宮殿の雲
自由選挙で選ばれた世界初の社会主義政権

僅か三年でピノチェトのクーデターに遭う
十五年も続く軍事独裁政権の中で行われた
十九年ぶりの自由選挙でもチリ国民は問う
幸福を夢見て選んだのは独裁の終焉だった

アジェンデを慕った詩人ネルーダの家を訪ねる
真冬でも緑に溢れる草と木々と雲が見える椅子
ここを訪れる人々は愛が平等であることを知る
やがて人々は政治も平等であることを思い出す



サンティアゴ市内のホテルから見たアンデスの山々（2014年7月撮影）

面白い女だ
顔に眼がついている
何も驚くことではない
自転車に乗って髪を靡かせていても
年齢だって見えている
こちらは夏の暑さに惚けて
網膜の後ろの回路が狂ったままだ
さっき出かける前は何者が仕組んだ悪戯か
辞書から「恥部の辺りに触る」
という横文字が眼に飛び込んだ
そんな痴漢の世界は避けて
そろそろ山の崖に咲く赤紫の
葛の花でも見に行きたいものだ

眼をそらすと道端の家の庭に
花梨の実が葉陰にいくつかの
眼のない青白い顔を見せている
大きな犬小屋には犬の姿がない
下町生れの町人じみた
大酒飲みの六尺男も先日死んだ
それで終りである
近頃は永遠という言葉をあまり聞かない
永遠を好んだ詩人はセンプリを飲んだ
ような気難しい顔をして
詩？ あんなものはつまらないと言い
と深沢の生垣の陰に隠れてしまった

鋭く後を振り向く灰色の女
足はポーとして消えている
影絵の花が傘のように連なって
月は丸く天空に聳えている
女の髪は細長く背に胸に垂れて
泣くでもなく恨むでもなく
凝っと睨み続ける振り向いた女の
痛み荒んだ小顔が漏らす咳は
空振する櫓の花園を素通りして
運命の糸を渚の遠くで編んでいる

灰色の空間を照らし出す月光は
大きな円を描いて女の姿を炙り出す
花は逆光を浴びて伸縮する

夕べの空咳は
背を丸めた女の口から吐き出されて
幽鬼を長袖の衣服に包む
疲れを月夜に晒して佇み
浮き上がる細見の朽縄の上半身から
額を交差する黒髪の垂れ姿が浅響する

女の凝然とした瞳は
幽かな浮遊体の星
朦朧とした写影の姿形
月は大きく眩く光彩を放っている
上がり行くのは死者の魂を抱いた葩の綾錦

村では、婚期を過ぎた女が一人で水辺に佇むことは、許されない。
それは、男に飢えた女の魂が、遂に邪悪な精霊に魅せられ、交歓を始めた証と見なされる。
女は、やがて精霊の子を産むだろう。そしてその子は村に災いを齎すだろう。
(殺さねば！)
そう、女は、殺されなければならない。
それは、聖なるシャーマンの仕事だ。
そして、私は、聖なるシャーマンだ。
その夜、私は、独り庵を出た。掟に従い、全身に紅い鳥の羽毛を纏って。
紅い鳥の羽。それは、太古からこの村に伝わる、神の花嫁衣装だ。
胸元には、首から紐で吊るした小さな石作りのナイフが揺れている。
殺害は、必ず石で行うこと。これもまた、不動の掟なのだ。
女は、やはり、今夜も水辺にいた。
青い霊気が、辺りを包んでいる。
女は、殺されなければならない。それは、聖なるシャーマンの仕事だ。
そして、私は、聖なるシャーマンだ。
私は、女を殺さなければならない。
たとえ、その女が、血を分けたたった一人の姉であっても。
神の花嫁は私だ。姉ではない。
姉の花婿は、邪霊だ。神ではない。
私は、姉に近づく。鳥のように。
姉は、私に気づく。蛇のように。
鳥と蛇とは、水辺で殺し合う。
それは、聖なる村の掟だ。
青い霊気が、辺りを包んでいる。
やがて、水辺に、鮮血が飛び散る。
紅い羽毛も舞い散る。
姉は死んだ。
私も傷を負った。
やがて、水辺の葦を掻き分けて、一人の男が近づく。
青い霊気が、男を包んでいる。
瞳が、紫に燃えている。
男は、私の羽毛を耄れ取る。
紅い、聖なる神の花嫁の羽毛を残虐に耄れ取る。
この美しい、若い男は神か、それとも水辺に棲む邪霊なのか。
私は、聖なるシャーマン。

私は、聖なる神の花嫁。

私は、この男を抱き締める。

全国指名手配されていた人物が捕まった

いつの間にか 他人の住所氏名を名乗り それでも一生懸命勉強をして得たという 介護士としての資格は 腕の良い面倒見のいい人 やさしい人として 職場の人望を得 格好な隠れ蓑になっていた 時には職場の人たちとの飲み会にも参加して 一般社会へ紛れ込んでいた

一組の男と女は あちらの役所 こちらの役所と 住民登録課へ毎日のように通った 自分に近い年頃の人を見つけると その人の横に立ち 何気ないふりをして 申請書を書く手元を覗き込み 住所 氏名 年齢を盗み取っていた うまい具合に書き損じの申請書を見つけ そこから新しい人物を作り上げようとしたこともあった そして 市民権を掴みアパートを借りることができた

逃亡の掟は 一所に住み続けないこと 近所の住人とあまり親しくしないこと そこがどんなに住み心地が良くても 男を変え 住まいを変え 名前を変えても過去を変えることはできなかった 今を変えたくない女は 指名手配されている事実を 新しい男に語った 女の過去を知らされた男は驚き悩んで自首を勧めた 女は今の男と切れたくなかった おびえながらも 手放したくなかった一日一日 大事にしていた一日毎 それでも男からの通報で捕らえられたらしい 男も犯人幫助で捕らえられたが

逃げなければならない生活と その年月が人相を変えた 豊かだった頬は痩け 手配写真にはなかった眼鏡はごく自然な姿 女は元の写真より美しくさえなっていた 逃亡のための整形手術はしていない とニュースは伝えていた 次々明かされる女のこれまで 生活は質素だった 真面目だった 職場の仲間たちも 居酒屋の主人も口を揃えて良い人だったと述べる 女にあった贖罪の気持ちがそうさせていたのか あるいは彼女本来の姿だったか

住まいは トタン屋根の元倉庫 カーテンは閉じたまま 赤錆た外壁 その一部に作られた生活空間 家賃も払っていた 今の生活に慣れてしまっても 女は逃げることの恐怖 追い詰められる恐れを忘れてはいなかった

もう逃げなくて良いのですから気持ちが楽になりました 何でも話します 捕らえられたとき女は素直な気持ちでそう語った かつて一緒に逃げていた手配写真の男は その後すぐに捕まった 犯人幫助でつかまった男は間もなく釈放された

私は組織の下っ端だったから 何も知らされていなかった 仕事の内容を知らなかった と言い続ける女

それは事実かもしれない たとえ全部の事情を知ってはいても そう言い続けても良いかもしれ

ない

裁判は長引くだろうが いつか事実を語る日がきっと来る 女の平安な日は必ず来るだろう

この土地とともに過ごした三十四年の生き様
今では生涯の半分以上を過ごしたことになる
横浜の港は見えないけれど遠くには丹沢の山々
その背後の白かった富士の頂が夕陽に染まる

きれいに一列に並ぶ四本の山桜が伐られてから
矢上川の最上流にある湧水もすべて埋められた
独りで妻を迎え二人の娘も生まれた土地だから
狼も彷徨していた昔の景色を残して欲しかった

朝の目覚まし時計は梢に止まる小鳥たちの合奏曲
砂利道で出会った呑気なキジの目の周りの色は赤
落葉樹の木々の中で一齐に点滅する蛍の下に行く
我が家の窓辺の明かりに餌を求めて集う狸の一家

着物姿の娘が七五三のお祝いに神社へ向かう朝に
叫び出す者は独りもいない極めて自然な光景だった
かしこまって玄関先でお見送りをしているように
一匹の蛇がとぐろを巻いた儘じっと動かずにいた

この土地が故郷になった二人の娘のためでもあるが
諂うばかりの偽造の花園から抜け出したかったから
朝の目覚まし時計もキジも蛍も狸も蛇も全て消えたが
終の棲家に決めたのはコナラの大木が一本残ったから



コナラの大木

一山を見て来る
と言って男が出掛けて行く
山が動くと言った者があった
真っ赤な嘘であって
真っ青な真実である
物は何であろうと動くのだ
この世を去った者だって
何処かでこそこそ動いている
横着者の心も動いている

山を見て何になるのか
動かない山を見て
心を動かすだけでは
山の動きは見えはしまい
時代もずいぶん動いたもので
静かな山里にも「痴漢に注意」
の看板が立っている

——靜軟和疾強烈颪。

かつて中學校の理科で習った風の分類だ。

なるほど良く分かる。

……だが、

風は單に強弱大小なのか。

雷もさうだ。

自然はわれわれに

豊かな恵みと癒しを與へてくれるが、

ひとたび怒れば、

その凄まじい形相に人はなす術を知らない。

昔の人は自然を畏れ敬ひ、

萬物に神を見た、

風にも、

雷にも。

それをアニミズムのひと言で

簡単に片付けてしまつてよいものだらうか。

素朴で敬虔な昔の人のほうが

今のわれわれよりも

よほど上等な人間だつたのではないか。

生きる知恵においても。

榮西と建仁寺展で風神・雷神圖を前にして

しきりにそんなことを思つた。

応答する花の陰から白い花片が浮き
黒い気流が充満して
暗闇の景色が運命の歯車を押す
誰が呼んだのか
原野の向うの薄暗い山並から
鈴の音が低音を響かせて
白い羽毛が飛翔する草の間に
影絵の水中花を埋めている

黒く霞んだ川面の浮き沈み
罪障の刻まれた樹木が呼んでいる
誰の罪でもないものを
鈴の音色が空中高く舞い上り
草花の暗い絵図の彼方から
呼鈴の振動が虚空を走り抜けて行く

誰も悪くないものをと叫ぶ
白い花片の声が飛散する

罪罰もみんな過去の陰画の中に
嵌め込まれて夢を覚ましている

墨に塗り潰された風景は暗く
遠い日の田園の歴白をなぞり続けている

応答するものは誰か

確かな暗闇の中から聞こえている
警告の音程は山河を越えて行くだろう
草木の背負った業の荒廃は消える

歩道の縁 車が通る端の方 植え込みに紛れて 土のあるところならどこでも 一斉に細く伸ばした茎 その先に揺れる橙色の花びら ちょっと見たところ 優し気な

ナガミヒナゲシ 外来危険植物 見つけたら即 駆除すること 一時期 新聞でも話題になり 心ある人たちは協力し合って 根を引き抜き 絶滅に努めた
しかしそのわずか一年後には 抜ききれなかった根は復活し こぼれた種は 生を得て一斉に 咲きそろった

雛罌粟 と書こうか 虞美人草 としようか そのどちらにも当てられない外来種 ナガミだって 地名か 人名か 一見優しそうな色 すっきりと伸びた茎 葉脈を 切り抜かれたような 深い切込みの葉

外来種の強さ 土の中でも生き抜く力 自ら生き抜くために 他を許さない 隙あらばと身構える 背高泡立草も 花粉症の元と嫌われた外来種
撲滅運動にもめげず 今も立派に生きている

関東蒲公英も日本蒲公英も セイヨウタンポポにおびやかされながら けな気に自分の立場を守っている 随分少なくはなっている

外来種として生き抜く輩は 飼いきれなくなり 池に放たれてしまったお祭りの日の亀や 鳥籠から飛び立ち そのまま籠脱け鳥として居ついてしまった鳥たちもいて 池の主として悠々と生きて来た 鯉たちをどこかに追いやってしまった 黒い魚なんかもいて

今日も外来種が元気良い 花を咲かせ 呼び声を放ち
日本中をおびやかす

横 瀬

北 岡 善 寿

杉の花粉に山が煙っている
景色にならん
武甲では高い処で発破の音がして
白い噴煙がもうもう上がる
何で山を壊さにゃなんのか
そこに山があるからか
去年は山の小道に猪の
子が出没したが今年は見えない
坂下の人家の敷地の小屋では
奇妙な獣の大きな悲鳴が聞こえた

近頃は山に行くのに地図
も持たずに歩くから
いつの間にか道に迷っている
藪を掻き分けてやっと村の道に出ると
思わず言葉が口をついて出る
横瀬を舐めるな
オコゼも舐めるな
道端の畑では午後の陽射しの中を
耕運機が動いている
点々とある梅の花影に時が動く
駅への道が判らなくて
学校帰りの男の子に訊くと
女の子より優しく教えてくれた
この先の横断歩道を渡って
右に曲がって
どんどんどんどん行って
それから左に曲がって
少し歩くとお寺があって
そこを右に曲がって
．．．．．

眞夏のうだるやうな暑さの日、
ふと氣がつくと、
まわりの丘陵の森に全く鳥の聲がしないのだ。
あれほどこしげく鳴き交はしてゐたのに。

蟬しぐれの忙(せわ)しい伴奏はいつものことながら、
じつと耳を澄ましてゐると、
その底に不思議な静けさがあることに氣づく。
まるで深い淵の中にゐるやうな。
魂を惹きこむやうな。
その不動の静けさにおのづと身を委ねてゐると。
次第にそれが身體の芯にまで沁み透つてくる。

そのとき、
唐突に
私の脳裏に古さびたひとつの言葉が浮かぶ。
——〈寂寞〉。
そのとき、
私は確かにそのもののただ中にゐたのだ。

……無言のままどれほどの時がたつたか。
鋭く甲高いヒヨドリのひと聲で我に返ると、
私は自分の部屋で
ただうつけのやうに座つてゐる自分を見た、
読みかけの本を前にして。

小さな庭の小さな温州ミカンの木
白い花が咲き小さな青い実をつけた
それでも何時の間にか底に葉が届き
気付かないうちに大きな実になった

青かった実が橙色に色づきだした頃に
毎年いつも油絵の審査結果の封書が届く
妻が描いた人物画もおおらかだったのに
一向に写真らしく描かないから落選に泣く

それでもガラス器や籠や花や森や山なら
不思議に本物の写真のような絵になっている
それなのに二十年以上も人物画に拘るから
静物や風景の大作には手を出さないでいる

公募展は作品と作品の競争だから残酷だ
芸術は比べなくても幾らでも美しいのに
本物らしく目立つように描かなければ落選だ
温州ミカンなら時期が来れば皆美味しいのに

絵画も食べて貰えるようにならねばならない
美しい絵は美味しいから皆で食べて仕舞おう！
強欲な絵を描く人は楽しくないに違いない
強欲な絵は美味しくないから見るだけにしよう！



温州ミカンの木

雑草ばかりの畑を整地し
浅い基礎を置き パイプを組み立てて
モデルルーム兼、売買契約会場 になるまでに数日
マンションギャラリーという
一見 見場の良い建築物が出来た

家族の休日
大きなものを買いに来た人たちの緊張した顔
抱かれた子供も笑っていない
磨き込まれたガラスのドアーは
ひっきりなしに開かれ
垣間見えた室内は
穏やかな色にまとめられて

一抱えもある鉢植えの観葉植物と
整理して置かれた
美しい色のプラスチックオモチャは
角のない滑らかな四角の積み木
子どもの姿は見えないが

早くもギャラリーの玄関ドアーは閉じられて
「完売御礼」の張り紙
行儀よいスーツ姿の社員は消えた
駐車場整理の警備員もいない

モルタルの外壁と思ったのは圧縮した発泡スチロール
ドリルで穴を開け
はがした後には鉄パイプの骨組み
けたたましい音を立てて放り出される
白い便器
見る間に壊されていく見場の良い建物

解体され始めて幾日か
建物は跡形もなく消えた

入り口辺りに張られた黒と黄色のロープ
通り過ぎる人は
自分の記憶を疑う

剥き出しとなった土に
ムクドリが群れる

行き場のない魂の牧場から
這い上がろうとする犬の病態は
いたずらに過ごして来た夢の仕打ち
口は渴いて息を吐き
舌はへ口へ口にぬめって鼻は光っている
歩くくの字の右前足は宙に浮き
三本の足は地に着いて老残を支える
伸び切った白い毛が体を覆い
尻尾の先まで深々と垂れて引き摺る
あてのない彷徨が始まる犬の末路は
目はすでに輝きを失い霞んでいる

歩く姿のよろめく痛々しい歩幅

よろめくしかない頼りなげな姿態を示して
鼻先は未知の匂いに死の予感を嗅ぐ
ひよろりとした長身の犬の精一杯の吐息

何処へ行くのか足は棒になり
骸の面影を路上に引き写しながら
食うものを探す意欲もなく
失われた時の経過を肉体に刻み
断たれた行き場のない老犬が飢えを覚えて
ひたすら崩れ去った生命の残骸を知る

吠える気力すら無くした獣の執念は
死と向き合うことの無知をものともせず
完全に幻の世界を往来しながら
弱々しく歩き続けようとする歩調の一瞬は
これまで生きて来たことの惰性を呪うだろう
口を開け舌を垂らし首は巻毛に覆われている

夜中になると
酔った男が気紛れに
みんな死んでしまって誰も居ない
遠い田舎の家に電話してみる
ひょっとしてあの世にかかって
亡霊の声が聞こえるかもしれぬ
ただ一人生き残っている者の願は
何と愚かで情けないことか
癒される事のない心の傷のように
深さも測れぬ孤独が
夜の広がりの中で疼く

とうとう或る夜
思いがけずに電話がつながり
母でない女の声が聞こえた
一なんだ 生きているのか
一なんとか
一まだ働いているのか
一仕方がないもの
一もう止めたらどうか
一養ってくれる人がいたら何時でも
亡霊じみた声が皮肉に笑い
気の弱い男は怯んだ
一ほな さいなら

株式会社の利益が上がってくると
給料が増えて消費も増えるらしい
お金も循環して景気が良くなると
人々の暮らしも裕福になるらしい

そのために法人税率を小さくして
株式会社が儲かるようにするらしい
財政も金融もお金を潤沢に供給して
物価高のインフレにしたいらしい

それでは年金だけで生活する者は
アベノミクスに貢献するのか不可解
増築もタブレットも要らない者には
景気に関係しているとは思えない

我慢して物を買わずに節約すれば
物を作る会社の利益が少なくなる
贅沢な食事も摂らずに儉約すれば
レストランの売上げも少なくなる

節約したり儉約しようとすることを
景気に良くない精神と言うのだろうか
清く正しく美しかった日本人の精神を
アベノミクスは騙しているのだろうか

遠い海鳴りを聞いて這い上った
一艘の小船が砂浜の上で傾く
夢を告げられた眠り人が横たわる
影絵の天沫線が走り
虹彩に色どられた擬態の顔から
唇が大きく捲られて
ずぶずぶの鼻が垂れている
水平線の遥かな島影から
幻視の白鳥が飛び立つ
月は淡く天空に陰り
眠りについた遠来の旅人の道程が舳う
小船は渴いた船底を見せて
砂場に身を秘めている犬の体が
渚の音色に合わせて舞踏する
畝ねるように軋るように問い続ける
問答歌のような砂上の時刻表
海鳴りは地平を伝いながら
眠り人の脳髓に伝播して
まぶたの裏に点滅する空白の闇
誰を呼ぶわけでもない
運命の時は刻々と砂を落として
花片を明滅させながら
赤い唇の厚い感触を滑って行く
遥かに遠望する城壁から醸し出される
夢を見る忘れられた過去からの子午線
誰が知る訳でもない
浮沈する小船の姿を揺曳し
砂浜は時おりゆっくりと上下する
誰の夢でもない
海鳴りは遠く近く船の記憶を彷徨している

畜生！
もうこうなったら
職場の前で
抗議の声明文読み上げて
きっぱり焼身してやる！

居酒屋で
友人（女）が
例えば、そんなことを言うわけだ。

ええっ？
おいおい、
あの……焼身って、
とっても熱いんだぞ？
分かって、言ってるの？

分かってるわよ！
ネットで調べたのよ！
自殺ばっかの動画のサイトで！
あれって、なかなか死ねないのよ！
苦しみ悶え続けるのよ！
いつまでも！
友人（女）は叫ぶ。
眼がイッてる。
熱爛は、すっかり冷めている。

だ、だったら、何で……？

分かんないわよ、そんなの、あんたには！
友人（女）は、激しく断定する。
仕方がないから、俺は沈黙する。
間が持たないので、追加を注文する。
「すみません、あの……焼き鳥、もう一皿」

焼き鳥――焼かれた鶏の死体――を
串から串りながら、
友人（女）は泣く。
しくしく泣く。
俺も、焼かれた鶏の死体を
相伴しながら食う。
「アチチチ！」

さあ、もうそろそろ帰るか？
俺は財布を探る。
友人（女）は黙って頷く。
俺は安堵する
よかった！
これでこいつは焼身しないだろう
もっとも
ちっとも昇進もするまいが.....。
「すみません、おじさん、お愛想！」

しかし、
その夜の夢。
友人（女）は、ほんとに焼身した。
しかも、
やっぱり全然死なない。
炎に包まれ
眼から鼻から口からホトから
赤や黄色のビームを放ちながら
職場を燃やし
地上を焼き尽くして
ビル嵐で舞い上がった上空から
何やら
めちゃめちゃ怒鳴っている。
いつまでも。

シルバーパスという 大事な大事なカードを持って
今日もバスに乗る
朝一通りの家事は さっさと片づけた
これで一日を愉しめる 今日の天気のように晴れ晴れと
停留所には幾人かの顔見知り 別に挨拶はいらない
じきに始まるどうってことのないおしゃべり
てんでん勝手に 誰も他人の話しなんか聞いていない

その中の誰かが気付いた いつもと違う外の様子

アッ 撮影？ ドラマ？
エッ 違う 警察がいる しかも大勢だよ
ナニ 事件？ マイクを持った人がいる
あの人知ってる テレビのリポーターだ

またもそれぞれにしゃべり出し
座席を立て 揺れながら外の景色にくぎ付け

ああ 事件があったの
今朝のテレビニュースで言っていた
この店だったんだ 殺人事件よ

隣り合わせた席の 訳知りそうな女性の説明
あの店は貸店舗だった
借主の女性は店の家賃を何年も払っていなかった
その額は数千万円にもなったとか

金返せ 払わないで済むと思うのか 何年知らん顔をし
ている いい加減に払わないとぶっ殺してやるぞ

何だいこんなボロイ店 客がいなけりゃ金だってないさ
家賃を払えったって払えりゃしないさ
殺せるならものなら殺して見な あんたは 人殺しだよ
やれるならやって見なっ

多分 こんな言い争いがあった
男は思わず 置いてあった鋏を取り女に向かった

電話に出ないと 心配して店に来た娘により発見された
熟練美容師の 恐ろしくも あまりに無残な姿

今は時間がないから 帰りにここで降りようよ
リポーターの話しも聞けるかもしれないしね
そうだね 帰りに寄ってみよう
バスは何回乗っても ただだしね

老嬢たちは市民体育館前で
ありがとうございました と
運転者に大きく声を掛け 元気に下りて行った

五 ロリアン

高等師範学校での三年間は、私に十分な観念を与えてくれたと考えます。最終的に成功したかどうかは決して問題ではありませんでした。ですから試験への不安はありませんでしたし、如何なる種類の恨みもありませんでした。私は、あるが儘に自分を示しました。少なくとも危険を負っているとは理解せずに、極めて無謀に考えていましたし、実際に何の危険もありませんでした。私は〈利己主義〉や〈愛他主義〉の授業を思い出しますが、それを考えると今でも顔が赤くなります。限らない信用が青年に開かれていることを知らなければなりません。

私は修行時代に至りました。職業が待っていましたが、私は何も想像していませんでした。取分けプラトンやアリストテレスの本が入っている荷物を、最初にひっくり返して開けました。尊敬するに足るこの二人の亡霊を冥府から呼び戻した時、私は授業計画の問題は全て解決済みであると信じました。それはポンティヴィ（1）でのことでした。私は、二つのクラスを合併して教えました。生徒は全員で三名でしたが、その中の一人は頭では理解していても何も理解するまでになっていませんでした。全員がバカロレアに合格しましたが、私はびっくりしませんでした。発見したのは、驚くべき思想の風景でした。古代人から始めれば、正しく始められるということとその時すっかり理解しました。すなわちプラトンは全ての時代に存在するのです。修正すべきことは何も理解しませんでした。その代わりにアリストテレスは、経験と照らし合わせると真実に変える尊敬すべき間違いを沢山集めています。下位の神々である彼の天体は、あらゆるものの中で最も完璧な円運動を探究し、愛しているのを手本にしたいと思っています。もっと適切に言うなら、物理学の神は無限の速度の円運動でしかなく、そのことで不動にもなるのです。ここでは全てが間違いですが、熟考によって全てが真実にもなります。というのも円は、曲線の父であるのは本当であるからです。アリストテレスは時々、宇宙の歴史の様相で精神の歴史を書いているように見えます。私はこの思想から薫陶を受けました。プラトンに戻ります。そうしなければなりません。しかし、プラトンも同様に余りに厳しいのです。何故ならプラトンは過ちや、殆ど自己から自己への罵詈雑言のために、所謂経験による間違いに絶えず立ち戻るからです。まさにその時は、永遠の人プラトンの前で人が勝たねばならないゆっくりとした変化や、ゆっくりとした進歩や、歴史の力に頼ることを考えない時です。一瞬で全ての正義と不正義を選択させて、それが全ての瞬間になる『国家篇』のソクラテスの前では、全てが妄想です。最早ここには運命はありません。あるのは過失と罰であり、もしも望むなら全てを新しくするために洗うことです。千年とは何でしょうか。その時間は思考する者には短く、欲望を抱く者には長くて限りありません。何らかの同情がなければ、誰もこの種の許しは余り好きではありません。各人は斧の一撃で自分の指を切るのです。しかも神は無罪です。私たちが良く望まない限り存在しないこの明晰な宿命に、私は心を奪われました。しかし何と危険でしょう。そして何という永遠の生命なのでしょう。

この光の哲学が何時も保持された儘になっていることを十分に知りながら、私はアリストテレスと共に農民のように大地を再び耕し始めました。私は、適当な本を図書館で探しました。教授の反復や脱線や躊躇を表していると言われたこれらの断片的なテキストを、私は一行ずつ注釈しようと思いました（沢山の人がやった後にです）。しかし、何という詩でしょう。アリストテレスは、先行していた哲学者たちのことを言いました、「全ての人々には道理がある。何故なら誰にも入口が許されているからであろうか」。そして奇妙な道によって笑わせる道理によって、今まで書かれた恐らく最も奥深い思想に、私たちが投げ入れるのはアリストテレスです。「それ故に、彼（神）は彼自身を思考する。そしてその思考は、思考の中の思考である」。これらの驚異に倣って、私はそれ故に全てを理解し、全てを救おうと試みました。私のアリストテレスと偉大なノートは、テーブルの上に置かれていました。絵画は私の唯一の休息でした。そこで再会した友人と一緒に私は走り回りました。私たちは絵の具とキャンバスにお金を浪費しました。でも私は、詩芸術よりも絵画には向いていないことを教わりました。私は部屋に戻って、一頁又一頁と書き加えました。そして、そこから教室にいる三人の生徒のために、あらん限りの声と雄弁で教えるに行きました。このような生活をして約六か月後に、私は過労の兆候を初めて感じました。そのことに如何なる考えも私にはありませんでした。何故なら、それまでは決して孤独の中で勉強したことがなかったからです。もっと正確に言うなら、修道士の独房のような中で勉強したことがありませんでした。私は死ぬかと思いました。一か月間病気になる、三か月間休職しました。私は生きる術を知りませんでした。

ポンティヴィでの教員としての修業時代の最初の一年の後にやって来たロリアン（2）で、私は先ずチェスの遊びと、気晴らしのための絵画を描きながらも、修道士と同じような生活を送りましたが、生徒の数も増えて、秩序を維持する必要性から仕事も少し増えました。序でに言いますが、秩序を維持する必要性とは、外見上は容易に見えましたが、実際は何時までも私を苛々させましたし、その中で権威とか威厳と言われているものを持ちながらも何時も疑い深くなりました。それは原因を理解していたからです。つまり日々次々に生まれる軽薄さであり、笑いの幸福さであり、騒音を生むあらゆる肉体の感染であり、生徒たちにあると仮定するのが望まれる愛情と尊敬の気持ちでもある軽快さではありますが、それらは正しくもあるが弱く、本質的に根が無く、ほんの僅かなことでも飛ばされて行く藁のようです。この苦い考えは、私が仕事をしている時間中は絶えず占領していたので、私には非常に重荷でした。非常に根拠のある慎重さを持っていたとしても、私は生まれつき何時も不用心でしたし、用意周到に準備していた時でさえも即興的に創ったり、喜劇役者的行いを拒みませんでした。これは危険なことです。しかし私は、何時もこの役を演じていました。それは私が後悔することもなくこの仕事を去り、素直に言うと言喜んで去った理由の一つでもあります。

この曲芸師としての演技には、二時間でへとへとに疲れたことは想像出来ると思います。ところが決して止まることがなく、独自の進歩で大きくなり、膨大な書物を幸いにも読んで理解し、手が疲れる程に書く注釈者としての仕事をずっと加え続けていたので、とうとう私は自分が本当に病気だと感じて、若い盛りに死にそうな自分を見て、絶望を自覚していました。私は何から何

までも間違っていました。私は四七歳から五〇歳まで参戦した後なら、この様な年齢を気にしないでいます。実際に当時よりも、私は動物的なものに今は満足しております。三年前に、所謂疲労というものの秘密を知ったのです。激しい発作によって知ったように、それは私の左耳の病によって起きる眩暈でした。しかし、それは如何なるものでしょうか。本当に死ぬかと思えます。それに反して、そのものを良く知った時、想像力は立て直されて、空想上の原因による痕跡に沿って走らされることは決してありません。殆ど全てが想像上の疲労という極めて現実的な理由にここで気付くことは、有益であると私は思いましたし、それは私の教育活動全般に付きまといました。確かに私の労働の方法はそれによって変わりました。私のあらゆる種類の野心も、消えないまでも鎮められました。そして、それと同時に陰鬱な観念に打ち勝つことも覚えましたが、それは哲学者の試練です。私が話をしている時代は、その様な考察を行うどころではありませんでした。少なくとも、短くて困難な人生を余儀なくさせられていると自分で理解していました。いずれにせよ、憂鬱な思考の中で、例え私には確信がなかったとしても、広汎に労働することは当時諦めなければなりませんでした。でも、それは良かったのです。そして隠れ家を出て、大変に陽気で活動的な町の中に足を踏み入れました。そこでは二人の友人に再会しました。ロリアンでの六年間は、一種の夜祭り生活で、私の憂鬱も治してくれました。その時に植民地兵や航海士の世界も少し知りました。そんなにも遠くへ行かなくても、船や大砲のことを考え始めました。それは常に私の思考の巻揚げ機でした。上昇する砲弾が落下の法則により、或る唯一の一瞬から絶えず落下するのが私には驚きでしたし、今でも驚いています。私はそこから天文学へ戻りました。私は至る所で疑問にぶつかりました。天体の軌道が如何にして大砲の軌道になるのか、私は理解しないで幸いでした。そのことは、私が少し知っている専門家の大尉には分かり切ったことのように思われました。勿論です。でも、私が何かの説明を求めた時、この理工科学学校卒業生は自分でも理解していないことが私には分かりました。プラトンが突然に私を照らしました。真の意見は学問ではないと私は理解しました。その大尉は、私が彼に負っているものを知ることはありませんでした。しかし何故、野心や権力や阿諛しか見付けることが出来ない金モールの服の下で、思想を求めるのでしょうか。私は何回も経験しました。そして厳しいプラトンが私に言っていることを思い出しました、「お前が望んでいるものを、お前は手に入れるのだろう。不幸者よ」。それは屈辱の連続で、私自身の中よりも私に似たもののの中で、より多く敏感に影響され易くなっているのです（各人は自分の背中に書かれた宣告を負っている、とプラトンは言っています）。それは鏡の前での屈辱の連続で、私は用心して自分で一種の偽装を負いましたが、私を知っている人々にとっては非常に危険でした。私は原則として、少ししか知らないことは信じないことにしました。そして、他人が言っていることを明白にするためにしか議論をしないことにしました。この薬は、他人にとっては良いものではありませんでした。何故なら、屢々彼は最早自分が分からなくなって、自分で考えている以上に愚かなことを言ったからです。そうでない時には、私は反論者たちを走り回らせて、荷物を負わせて詰め込んだことに注意して下さい。というのも人は何時も賢者ではいられないからです。そこから私を十分に知らない人々に、極端な不信を私は何時も感じるようになりました。仕方ありません。プラトンの世界は悪くないし、良

くありません。しかし、その照明によって恐ろしいものです。真の意見は学問ではないので、人は絶えず全てに恥じるのであり、それが善であっても恥じるのです。恐らく私は、最後に良識への恐れという何らかの観念を与えるのででしょうし、それは全てが明白になります。その観念に関するものに、何ものでもない愚かさを突然に照らします。そして、一つも奥深いものがありません。というのも私たちの仲間である諸器官、手や顎、長い足、飽くことを知らない腹、不幸の鏡である肝臓も又全てが奥深くなかったからです。もしも見る術を知っていたなら、それらは思考しないダイヤモンドです。私は、樂園という恐ろしい明るさの下で、でこぼこした道を出来るだけのことをして歩きました。私は、私の魂を器官で一杯にしませんでした。人が何も見ていないこの明るさで、魂は全てを十分に行わなければなり

ませんでした。しかし、私はここでアリストテレスの全てに敬意を表します。そして公平であるために言いますが、プラトンの子供たちは、「もしも十分に望んでいたなら」、救いが現実である限り、無礼で軽率です。結局のところ彼らに宗教はありません。過ちを正して濃くすることを知りません。あなた方は彼らがいる場所を非難します。彼らは最早、既にそこにおりません。彼らには悪徳も最早、美德の役割を果たしております。悲しむ術を決して知らなかった全ての悲しい人々に、私は許しを乞います。

私が如何にしてプラトンに戻ったのかを理解されるなら、恐らく軽薄さからです。しかし他にもきっかけがありました。私が愛好家の素人の儘で功績もなく出席した地理学学会によって、私は地理学の研究に身を投じました。ブルターニュ地方の土地を一つずつ研究しました。グロワ島（3）の未開の小さな谷で、古代氷河の跡も探求し発見しました。そこから自然なことから私は、全てを知るという観念に到達しました。私が地球や動物やあらゆるものの物理学についての知識も身に付けました。当時、私には全く単純で謙虚な生徒がいましたが、彼は数学の天才でした。私はどうにかこうにか彼にこれらの哲学を教えました。彼は全てのことを容易に理解しましたし、決して反論もしませんでした。彼は、天才の方法を沢山教えてくれました。というのも私は、未だ小さくて天才の難を観察していたからです。彼は数年前に、パリ天文台の計算家として亡くなりましたが、恐らく彼が書いた論文は世界中で二人しか理解出来なかったでしょう。彼の名前はファトゥと言いました。私の考えでは、彼は数学者の不安によって死んだのです。そして彼のような人は一人ではありません。私はここで将来がある、全ての天才たちに一種の厳粛な忠告を与えたいと思います。彼らは、才能に恵まれていない方を彼らの裡で伸ばすように勉強すべきです。その時、彼らは喜びを手にするのででしょうし、立派で明るい未来が開けます。

お分かりのように私は美しい雲に住み、そこから大空と大地を判断しました。気晴らしは政治ですが、それは大変に乱暴なものでした。ある日、軍隊におけるあらゆる国の言葉の通訳でもあった同僚のドウヴィルが新聞を見せながら私に言った言葉を思い出します、「ドレフュスは絶えず無罪を叫び続けていたのだ」（それは罷免された翌日でした）。彼はつけ加えて言いました、「私は軍人を知っているが、彼らは二度と戻れない大変な間違いを犯していると思うね」。滑稽なまでに軍服を愛していたこの男の言葉は、直ぐに私の心を惹きつけました。彼の判断は乱暴でしたが、殆ど何時も正しかったのです。しかしながら私の膨大な読書は、決してしっかりした教

養になっていなかったことも私は言わなければなりません。彼が戦争好きだったのは本当です。あらゆる人と口論して、言語学的知識が豊富でしたが、戦争中に司令本部で死にました。それと共に彼は物理学の実践家であり研究者でした。私が知り合った唯一の真の軍人でしたが、実際の軍人ではありませんでした。

ドレフュスについての彼の予言は、文字通りに現実のものになったのはご存知の通りです。私は更に、その後の驚くべきことを述べたいと思います。私は戦後に、毛深い大尉と知り合いになりました。彼は良き友人で、見たところは自由な精神の持ち主でした。ところがある日、彼は私に言いました、「私には先入観はありません。従って、もし私の略歴を読んだなら、あなたはドレフュス事件問題について私が両派の主張を公平に信じて要約したことをお分かり頂けるでしょう」。私は彼に言いました、「あなたは大変ご立派です。でも結局のところドレフュスの無罪は異論の余地がない事実です」。彼は話を変えました。「この人間はドレフュス派だ。十分に予想しなければならない」と彼が考えたことは推測出来ます。

私は間違えたのです。私がドレフュス派になったのは本意ではなく、軍部派の新聞で読まれた実に多くの愚かな記事によってです。別な風に言うなら、私は参謀将校が自分の机の引き出しで指を挟まれた位のことでありと冷静に見ていました。何故なら軍隊史を序でに勉強していたからです。これらの乱暴であるが慎重な人間たちの考えを、私は偉大と思っていませんでした。取分けスパイ行為や体スパイ行為に関することは特に全て軽蔑していました。この様にして私は、冷静な審判員の地位にいる自分を見出していました。しかしながら、高位高官たちが間違いを殆ど誇りにして、彼らは私たちを支配するのを想起させる機会にしようとしているのが明白になった時、私は反抗に身を投じましたし、ドレフュス派の友人たちを支援しました。私たちは軍隊を退役する時に、軍隊万歳を絶対に叫ばないことを誓いました。そして、小公園のベンチで議論しながら兵器庫の労働者や水兵たちの支持を得て、私たちは町の指導者になりました。そして私たちがさえも、もしも軍事クーデターが起きた場合には、自治団体にかなり近いものを準備しました。私はですから動物に、私としては情熱と言いたいのですが、身を委ねていました。そしてこの情熱の中で、私は多くの物事、多くの人物を批評しました。やがて私が政治的陰謀を分かり始めたのもそこからです。その様にして私は、手当たり次第にマルクスやプルドンの本を読み、反抗という全ての河の源流であったルソーの『社会契約論』へ遡らなければなりませんでした。

(完)

- (1) ポンティヴィは、ブルターニュ半島のほぼ中央に位置する町。
- (2) ロリアンは、ブルターニュ半島の南側に位置した大西洋沿いの町。
- (3) グロワ島は、ロリアン沖にある島。

この翻訳は、Alain, *Histoire de mes Pensées* (1936) の全訳を企図としている。全三十四章を毎月一章ずつを目安にして登録する予定である。テキストとしては、〈Alain, *Les arts et les dieux* (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1958〉に所収されているものを使用している。我が国における本書の翻訳は既に幾つかあるが、アランの思想を斟酌しながら新たに出来るだけ丁寧に翻訳し熟読することは、フランス文化を探究したい私にとっての長年の課題であった。

又、アラン（一八六八—一九五一）ことエミール＝オーギュスト・シャルティエ（本名）についての伝記を書くことを或る友人から勧められたのだが、アラン自身も言っているように私的なこと、家族や家庭のことを書くのをアラン自身が自ら嫌っていたため、局外者の私がアランの伝記を書くことはアランにとっては不本意のように思われた。又、生憎とその力量もない。従って、アランの精神にとっての伝記ともいえる本書を翻訳することで、その友人に応えたいと思う。

なお、本書を翻訳するに当たり、森有正氏（一九五一年）及び田島節夫氏（一九六〇年）の優れた訳書を参考にしたが、多くの教示を授かったことに感謝申し上げる。

そして、この翻訳を通して、何時の時代でも決して古臭くない新鮮なアランの思想を理解し味わい、より良い生涯を創る機縁になって戴ければ、訳者としてこれ以上の喜びはないと思っている。

なお、既訳の章は同じく「ブクログのパブー」の電子書籍『わが思索のあと』に登録中である。

（完）

執筆者のプロフィール（五十音順）

北岡善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットタントにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『檻』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ会員。日本ペンクラブ会員。

齋藤 忘（さいとう まもる）

一九二四年五月十五日、ソウル生まれ。二一歳敗戦で単身帰国。本籍山形県鶴岡市。戦後唯一の月刊詩誌「詩学」に二五歳で発表。詩集『葬列』（彼方詩社）、『後生車』（無限）、『石墨草筆』（国文社）、『影ふみ』、『暗い海』（詩学社）、『遠い旅』（私家版）、『漢江の青い空』、『齋藤忘詩集』『夕映えの定期便』（土曜美術社出版販売）。評論集『植民地と祖国分断を生きた詩人たち』、『生理的抒情試論』『詩と自画像』（同上）。作品収録『戦後詩大系Ⅱ』（三一書房）、『日本現代詩大系12』（河出書房新社）、『精選日本現代詩全集』（ぎょうせい）、『日本の名詩』（平凡社他）。詩歴は「零度」、「現代詩評論」を経て「彼方」を二十年間発行。日韓文化交流に努め、韓国に知己が多い。元現代詩人会理事長（一九八七年～八九年）。二〇〇六年六月二日、杏林大学病院に入院中のところ急性腎不全による出血性ショックにより死去する。享年八二歳。静岡県駿東郡小山町の富士霊園に埋葬される。一周忌に『齋藤忘詩全集』刊行（齋藤忘詩全集刊行委員会編・土曜美術出版販売・二〇〇七年）。同書に所収されず、その後新たに発見された未刊詩篇が同人誌「風狂」に漸次掲載される予定である。

高村昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。学生時代に同人誌「遡行」を発行。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロボ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤忘詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九六年に個人誌「パープル」創刊（四〇号から電子書籍）、同年「風狂の会」会員になる。一九九八年に「現代詩と社会性

「アラン再考」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（ブクログのパプー）に、エッセイ集『アランと共に』、アラン作品の翻訳及び同人雑誌「風狂」などを登録中。日本詩人クラブ会員。

中平 耀（なかひら よう）

一九三〇年生まれ、群馬県出身。詩集『吊るされた鳥』（思潮社・一九六一年）、『時の中の橋』（詩学社・一九七三年）、『樹・異界』（神無書房・一九八一年）、『花についての十五篇』（花神社・一九八六年）、『滑稽譚』（花神社・一九九二年）、『木』（花神社・一九九七年）。訳詩『マンデリシュタームの詩』（集英社『世界の文学15・ロシアⅢ』・一九九〇年）、詩評論『マンデリシュターム読本』（群像社・二〇〇二年）。二〇〇二年、『マンデリシュターム読本』により第四回小野十三郎賞特別賞。これからしたいことは、集大成した詩集を出すこと。

長尾雅樹（ながお まさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

「日本現代詩人会」「日本詩人クラブ」「時調の会」各会員

「櫟自由詩の会」同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はら しげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）等。現在短編小説集『永遠の、地上の（仮題）』刊行準備中。典型的な「ウルトラマン世代」の「怪獣少年」で、齢知命に達した今もなお、心のどこかがその永遠の「神話」の森を彷徨い続けている。十代後半から二十代前半にかけてカルト的な宗教活動に没頭。その後フロイト、ユング、ラカン等の精神分析家の著作に傾倒し、一時は専門の心理臨床家を志したこともある。好きな書

き手はJ.G.バラード、M.ピーク、尾崎翠、埴谷雄高等。絵画ならダリ、デルヴォー、バーン＝ジョーンズ、音楽ならドヴェツシー、ラヴェル、セロニアス・モンク等に魅かれる。日本詩人クラブ、日本短歌協会会員。

堀口精一郎（ほりぐち せいいちろう）

一九二七年三月、東京生まれ。青春前期は皇国少年として熱血の血をたぎらせた、いわば戦中派のはしくれ。戦後は文芸特に短歌に親しむ。一九八九年仲間と共に詩誌「さやえんどう」創刊、詩を書き始める。

詩集『マンモスの轍』（土曜美術社出版販売・一九九四年五月）、『神の魚』（横浜詩人会・二〇〇〇年十月）などを刊行。

二〇一四年七月、二五年間編集発行人を続けてきた詩誌「さやえんどう」を終刊。

同じく二五年間実績を残してきた月二回の研究会も解散。身軽になった。

現在は、日本詩人クラブ、横浜詩人会、風狂の会に所属するのみ。今後は楽しく生きてゆきたいと思っている。なお未刊の詩篇が多数残っているので最後の詩集を出したい。

（以上）

同人誌 風 狂 (ふうきょう)
2014年版 (1号～5号・合併号)

<http://p.booklog.jp/book/90172>

編集: 風狂の会 (担当: 高村昌憲)
編集担当者プロフィール: <http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/90172>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/90172>

電子書籍プラットフォーム: ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)
運営会社: 株式会社ブクログ